



お ち ほ

第16号 平成2年3月31日 発行 社会福祉法人 椎の木会 落穂寮 発行者 増田 正司



落穂寮が サンタの国に クリスマス ★

毎年恒例のクリスマスパーティーが、今年も沢山のお客様を招待し、盛大に開催されました。昨年の12月23日、当日は親御さんも含め二八〇名近くの皆さんが集まって頂きました。プログラムは午前中は寮の子どもたちによる出し物、午後は招待の皆さんによる出し物、最後に全員でのフォークダンスでした。仏教大学実習生、山口さんのトランペット演奏、石山高校軽音楽部の皆さんの演奏、奥村商店社長さんの手品、おなじみの老人クラブの皆さんの歌、それに椎の木会役員である畑中ちよさんの踊りといった盛り沢山の出し物で楽しく過ごしました。また昨年八月の交流会で知り合った石部小学校のお友達も沢山集まってくれました。

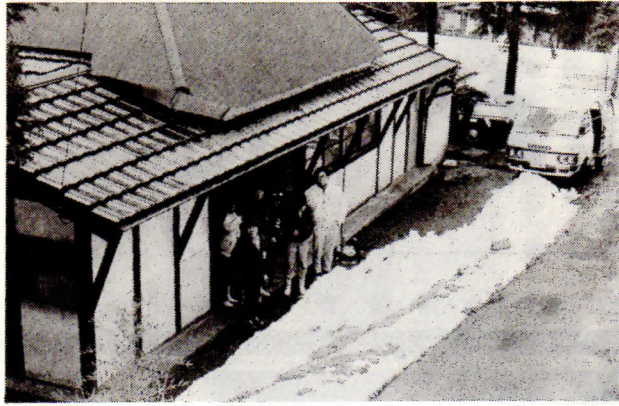
当日は会場を「サンタの国」にしようとして、連日準備に奮闘、ステージや模擬店、入口などにも職員の創意工夫が凝らされていました。特に巨大なリースで作られたクリスマスツリーは一際皆さんの目をひいたようです。毎年地域交流の一環として行なっているこのパーティー、次回も沢山の皆さんが集まっていたいただきたいものです。

「杉山の家」にかける思い

寮長 増田正司

昨年11月、今津町杉山の地に古家を買いました。杉山で最後の一軒になった岸本先生のお奨めがあったからです。先生は今津町にある特別養護老人ホーム「清風荘」の荘長さんです。

杉山は今津から小浜に向う国道三〇三号線沿いにあります。保坂を過ぎ長いトンネルを脱け、旧道



に入り数棟の家屋が散在する小さな集落です。昔は集落の中を鯖街道とも言われた苦狭街道が通って関所が設けられていたそうです。三〇三号線はこの小さな集落を見下ろす高さの所を走っています。大型トラックがビュンビュンひっきりなしに音を立てて通ります。今津、小浜間のJRバスの便が日に18往復あります。落穂寮を開設以来よく知っているお医者さんが、もう一つトンネルを越えた上中町の病院長です。寮生の病気の時はいつでも手伝うと約束してくれています。

石部も自然に恵まれた便利な暮らしです。それに比べると、とても奥まった人里離れた住いですが、閑静で自然にあふれた安らぎを感じます。土と山に親しむ生活の中から障害の重い人たちの家作りをしたいのです。

既に成人に達した人たちに、ここが生きて行く拠点になってほしい。弱い人が協力しお互いの生活体を作るのです。難しさや厳しさ

が指摘されますが、未知の世界に挑戦し社会自立を阻む壁を乗り越える努力をしたい、そんなことを思っています。

案内され初めて古家に入ると、カビ臭い匂いがツーンと鼻につき、薄暗い中にごみと埃をかぶった古びた家財道具やガラクタが散乱し、部屋の隅から物の怪が飛び出しているような感じでした。手のつけようがない荒れ具合で、人が住める



のか心配でした。二月の大雪の時には3mも積るから、年内に片付けや掃除をすませようと何回か出かけて、年末までにやっと人が住

めるようになりました。また村の人たちが大事にしてきた氏神さんの周りも見違えるようにきれいになりました。年が明け、泊りがけで作業に行き出しました。寮生はバス遠足で合宿に行く気分ではしゃいでいます。所変わった風情を楽しんでいるようです。

今は離村した家族が代々住んできた田舎家なので寮生たちが今様の生活を始めるにはかなり改造が必要ですが、とりあえずの手直しと設備、備品を揃えることにしました。年長児が代わる代わる杉山で生活体験するようになり、少しずつ住まいらしくなり、周辺の傾斜地に栗や柿苗を植えてみました。生い茂ったかやを刈り取ると畑地が見えてきました。春が待たれます。

しばらくは寮の持ち出しが増えてしんどくなりますが、全寮的な支えにより頑張って成功させたいものです。施設から社会の中で生活することの試みが新しい波紋になって輪を拓けて行くことを願って止みません。県や関係機関のお力添えにより、こうした家が各地に実現して行くことを望みます。(90・2・20)

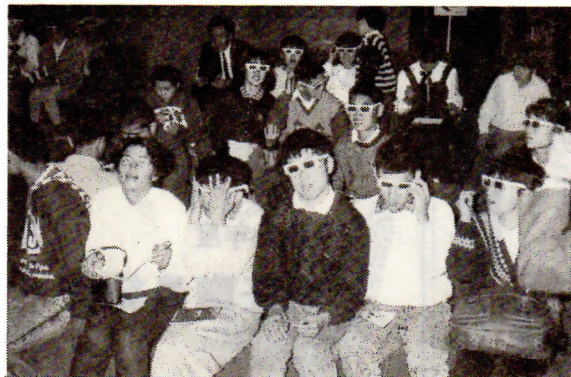
生活棟より

「開腹手術、その後先」

B棟指導員

山下陽一

昨年の四月中旬の事でした。二〇歳になるK君が急に腹痛を訴え始めました。朝のランニング中、腰を落し腹を押かえているので、あまり痛そうにするので、部屋に入れ横にしましたが、顔色は普通だけれど、どうもおかしいというので近くの救急病院へ連れて行きました。診察に当たった先生は、



旅行にて3D映画を見る

「顔の表情も悪くないしあまりひどい病気ではないでしょう。一応レントゲンを取っておきましょう。」ということでした。私達もホッとしていたのですが、その写真ができて診察室に呼ばれました。先生方はむつかしい表情をしておられます。重苦しく言われました。「汎腹膜炎状態になっています。緊急に手術をしないと生命に関わります。」これは腸に何かの原因で穴が開き、腸内の物がもれ出ていて、症状がどんどん広がってしまっている状態だそうです。緊急手術という病状なのですが、当人、知ってか知らずか、ヒヨコヒヨコ歩いて手術室へ入って行きました。約四時間も要したでしょうか。術後執刀に当られた先生から手術室の横で説明を受けました。お腹の中の一番外側を回っている大腸、しかもそのヘソの辺りを横に走っている横行結腸をほとんど切り取ったという事でした。私は腸は管の様な物と思っていたのですが、幅が広いひだが付いているのです。それよりも驚いた事は、胃の中から手の平大のビニールなど色々なものが出てきたことです。私達は啞然としました。

私達は責任逃がれはできないと

思いました。改めて命を守りぬくことの重さを感じさせられたのです。

年長女子棟あれこれ

C棟指導員

中嶋貴一郎

最近、C棟の子供達を見てみると、大きくなったなあ、としみじみと感じさせられる。それは、年齢や体格だけでなく、普段のしぐさや感情の表現等にしばしば感じられるようになって来ている。私自身、それを見てハッとさせられる



C棟スキー教室

ことが多くなって来た。年少のころより、長くいっしょにいると、子供達が大きくなったことに気づかずに日々を送り、いつまでも子供あつかいをしてしまっているのではないかと感じてしまう。

子供達も、(もう子供とは言えないと思うが)寮の中で24時間生活する中で、大きくなるにつれて健常児と同じ様に、いろいろな所へ行ってみたい、いろいろなことをしてみたい等、より多くの欲求が出て来ているのではないかと思う。それに対して、私をはじめとして、C棟の職員が、どれだけ、子供一人一人の欲求に答えられているだろうかと疑問を感じることにしばしばである。

今年、C棟では、子供達の様々な欲求や要求の一つでも答えていける棟づくりができればと思っている。例えば、家庭クラブをつくって、裁縫や調理実習をしてみたり、個人個人で買物に出たり、外出したり、又、クラスで棟をはなれて合宿したり外出したりと言った具合に、子供達が家庭で生活実感を感ずるのに近い状況がづくり出せたら幸いかと思っている。

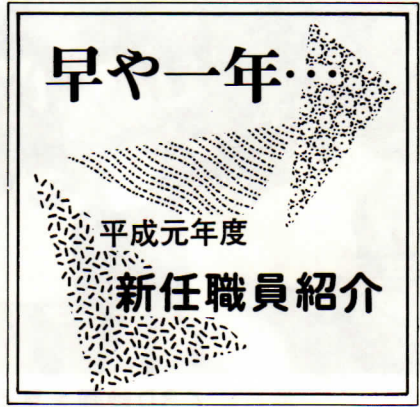


丁野先生

「光陰矢のごとし」という各言も
ございますように、この落穂に就
職して、はや、一年が過ぎようと
しています。大学二回生の夏、落
穂寮に実習にきて以来、この寮の
温かい雰囲気惚れこんで、湖北

A 棟 保 母

丁野真美



の田舎を後にいたしました。それ
からは、「あつ」という間の一年で
した。皆様の心の中にも、「よお
のさなみ」といえば、チビでのろ
まなカメであるというイメージが
しつかりとうわってしまったので
はないでしょうか。しかし、「ヤ
ル気」と「バイタリティ」があるこ
ともしつかり、心に留めておいて
いただきたいのです。

間もなく、新年度がスタートしよ
うとしています。何よりも、「子
供を深く愛すること」を基本とし
て、何事からも学ぶという姿勢を
忘れずに、子供達にとって、よき
母、よき師となれるようにがんば
ります。チビで、のろまで、ドジ
な私ですが、ハートの温かさを忘
れずに一生懸命がんばりますので、
これからもどうぞよろしくおねが
いいたします。

A 棟 保 母

堀井八重美

落穂寮に勤めるようになって、
もう一年になろうとしています。
この一年は私にとって初めてのこ
とばかりだったので、いろいろな
体験をして時には不安に思ったり、



堀井先生

失敗をしたりと繰り返しながらも
自分自身、精神的に強くなれたと
思っています。まず、改めて自己
紹介をさせてもらいます。私は石
部町とは近隣の竜王町の出身で、
石部と同じように自然に恵まれた
小さな町です。滋賀女子短期大学
在学中に学校の教授の紹介をいた
だき落穂寮に勤めるキッカケとな
りました。私が施設を希望したの
は、第一に子どもが好きで、障害
を越えて心と心との繋がりをもち
たいと思ったからです。これから
は生活の中の慣れだけで日々を送
らないように気を付け、再び初心
に還った気持ちを持ち、新鮮な
目で子どもを見つめていきたいと
思っています。



B 棟 保 母

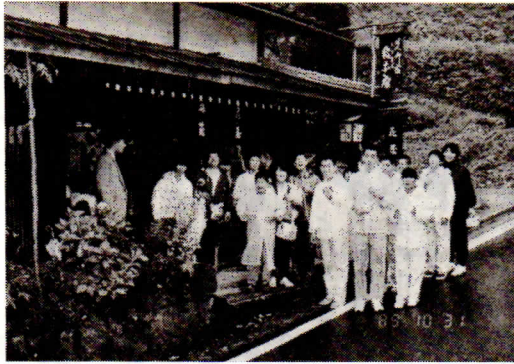
飯田真希子



飯田先生

落穂寮へ来て、早くも一年経と
うとしています。「はじめまして」
というには遅すぎますが、初めて
新潟県出身、現在B棟所属、飯田
真希子です。

昨年までの生活とはうって変っ
ての新しい生活に、惑いながらも、
職員の皆様、寮生達に助けて
もらい今日に到っております。ま
だまだ頼りなく、未熟者で仕様が
ありませんが、これからもよろし
くお願い申し上げます。



馬籠宿に到着！

年少旅行報告

去年の10月30日(月)～31日(火)の一泊二日の日程で、短期帰省中

みんなで旅行に行きました。

● 年少旅行

恵那峡・木曾方面

● 年長旅行

南紀・白浜温泉



楽しくりんご刈り

を利用して年少旅行に行きました。A棟児童16名、B棟児童7名、C棟児童6名、職員・保護者16名の総勢45名の参加で、恵那峡と木曾路を訪ねました。

一日目は恵那峡で遊覧船に乗り、昼食後りんご園でりんご刈りをしました。食べ盛りの子ども達には昼食のバーベキューが少々物足りなかつたのか、りんごを4個5個を食べている子もいました。駒ヶ根グランドホテルに宿泊しました。夕食は子ども達の歌も飛び出し、とても楽しいものでした。

二日目は生憎の雨のため予定を少し変更して、うさぎ組(大きい子)は馬籠宿まで、かめ組(小さい子)は馬籠峠から馬籠宿まで歩くことにし、それぞれカッパを着て

頑張りました。かめ組がバスで馬籠宿から移動し、妻籠宿で昼食を取りました。雨の中を歩いた疲れも見せず、元気に帰寮しました。今回の旅行は雨に降られたことが少々残念でしたが、子どもたちに普段の生活の中で体験できないことをさせてあげようという目的は、恵那峡の紅葉や、馬籠宿の石畳を歩いたことなどで、十分果たすことができたと思います。

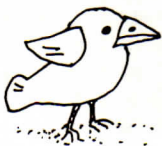
年長旅行報告

12月6日(水)と7日(木)と和歌山県の白浜温泉へ年長児の旅行へ行きました。朝の通勤ラッシュに

もまれながら新大阪まで行き、特急スパーくろしお号に乗り一路白浜を目指しました。車内で駅弁を広げました。白浜に着いてからはまずガラスポートに乗りました。グラスポートとは船の中から海の底がのぞける仕組みになっており、海女さんの姿や魚の泳ぐ姿が見えるものでした。初めて見る海底の様子に皆歓声を上げました。次にエネルギーランドに行き、3D映画や恐竜の模型(動きまわります)などを見ました。O君はお絵かきロボットに似顔絵を描いてもらい、お土産にしました。平行感覚に錯覚を

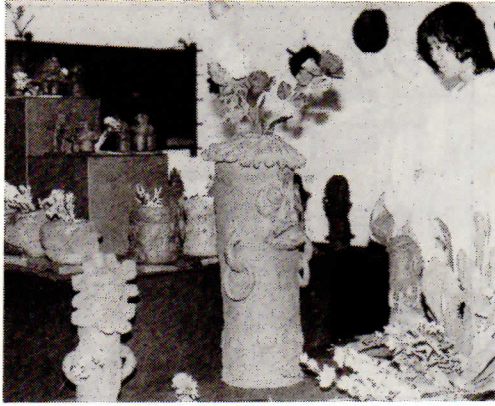
起こさせるような家や、迷路のようなパラレルワールド等、それぞれ班ごとに楽しみ、旅館へ行きました。ホテル三楽荘はすぐ目の前が砂浜で、部屋からの景色も最高でした。入浴を済ませ、夕食になりました。夕食後は各班ごとに買物や、砂浜での散歩など楽しみました。夜尿をする子が一人もなく夜が明けました。朝からワールドサファリに出かけました。車の中から真近にライオンやトラを見、イルカやオルカのショーも楽しみました。お土産を買い、また特急に乗り帰途につきました。

今回は交通手段に鉄道を使うという点で皆少々その点では緊張がありました。実際列車とホームの間に靴を落したりするハプニングもありました。子どもたちにとっては盛り沢山で楽しい旅行だったかもしれません。その分職員はハードだったかもしれませんが、しかし今後とも職員のやる気が旅行を支えているという思いに立ち、計画を立てて行きたいと思えます。



東京作品展 盛況でした

11月の1日から6日まで東京での粘土作品展が行なわれました。今年には作品展十周年、場所は長年慣じみの深かった銀座を離れ、池袋の画廊「アトスペース・スヨウ」を借りて行なうことになりました。画廊は「こんな所に画廊が？」と思われる程の歓楽街の中にあり、来る方々皆一様にびっくりしておられました。初日から沢山の方において頂き、応待に忙しきで嬉しい悲鳴を上げる程でした。お陰様で沢山の子どもたちの作品がそれぞれの御家庭の一員として引き



応援にかけつけて下さった皆さん

取られ、最終日には展示する作品にも窮する状態でした。今回の作品展では以前からお付き合いのあった練馬区の障害児学級の先生方、都図画工作研究会(都図研)の先生方が多数応援にかけつけて下さり、前日準備から後片付けまで全面的に手伝って下さり心強い思いでした。池谷先生は「東京での作品展は今回十周年を区切りに終えるつもり…」と言っておられました。練馬区の先生、

都図研の先生方の厚い要望に決心がぐらつきかけた様子でした。落穂寮を支えてくれる沢山の方々の協力に大きな感謝の気持ちで東京を後にしました。

平成元年度事業

浄化槽改修工事の

報告として

長年の懸案事業であった浄化槽の改修工事が実施され、合併処理浄化槽として昨年末より使用を開始しております。雨水以外の生活排水、汚水が処理され、衛生的な水として放流されています。この改修事業が完了したことにより、今後施設内での新增改築が実施された場合でも汚水処理等について衛生的かつ安全にすすめることができるようになりました。

なお、この改修事業実施にあたっては、県主管課、地元の方々、保護者の皆様、法人関係の方々のご協力ならびにご援助をいただいたことよって無事完了することができましたと考えております。紙面を借り厚くお礼申し上げます。今後ともご支援ご協力の程お願い申し上げます。

泉

▼落穂寮は新年度体制を控え様々な議論がなされています。特に「杉山の家」に関して、どのような体制で取り組むのか、子どもは何人送り、職員はどうするのか。新しいことを始めるにはとかく「生みの苦しみ」がつきまとうものかと思えます。誰一人確信のある答を持っていません。しかし漕ぎ出した船、どういう形にせよ、職員一人一人の開拓精神でこの記念すべき事業に当たって行きたいと思えます。親の会の皆様、関係各方面の皆様のご協力をよろしくお願い致します。

▼先日「オモニの歌」(岩井好子著 ちくま文庫)という本を読みました。戦争中に韓国の済州島から日本に働きに来た人たち(オモニ=母の意)の話です。言葉も通じないままひきつけの子を抱いて途方に暮れる母親。気がつくまでにはその子は手の中で冷たくなっていました。私たちも言葉無き(少なき)子どもたち相手の仕事です。これからも子どもたちの声なき声に耳を傾ける努力を怠ってはいけないなと思えました。